

いちょう団地地区

## 多様な文化背景を持った人たちが 個性を出し合い楽しいまちづくりを目指す



横浜市から大和市にかけて広がる「いちょう団地」は、約4分の1の世帯の住民が外国にルーツを持つ人たち（以降外国人と略）であるという全国でも有数の「多文化共生地域」です。

この地域で、20年以上にわたって「多文化」を切り口としたまちづくりを進めている、多文化まちづくり工房代表の早川秀樹さんにお話を伺いました。

### ■ともに暮らせる「場」をつくる

「多文化まちづくり工房」は、1994年ごろからこの地域で暮らす外国人たちを対象として始めた「日本語教室」を軸に、いちょう団地で活動してきました。活動が続ける中で、少しずつ生活や地域の状況が見え始め、自分自身の生活の時間や空間を変えていかないと、

外国人たちが抱える問題の根本的な解決につながらないのではないかと考えるようになりました。そこで活動の拠点をより外国人の方の生活の場に近い場所に移し、地域の自治会や学校、行政ともつながりを持ちながら、教室だけでなく「まち」そのものが居場所となるように「多文化まちづくり工房」として活動を展開してきました。



多文化まちづくり工房代表の早川秀樹さん

私は「外国人とどうやって仲よく暮らしていくか」より、「同じ地域に住む者同士、一緒に生活するには何が必要か」を考えることの方が大切だと思います。

ですから、相手が外国人であるということをあまり意識していません。

そもそも私自身、日本語しか話せませんので。多文化まちづくり工房として、その理念としての「多文化共生」や「外国人を受け入れよう」という話ではなく、「一緒にこの町をつくっていきましょう」という意味をこめて「まちづくり」という言葉を使っています。

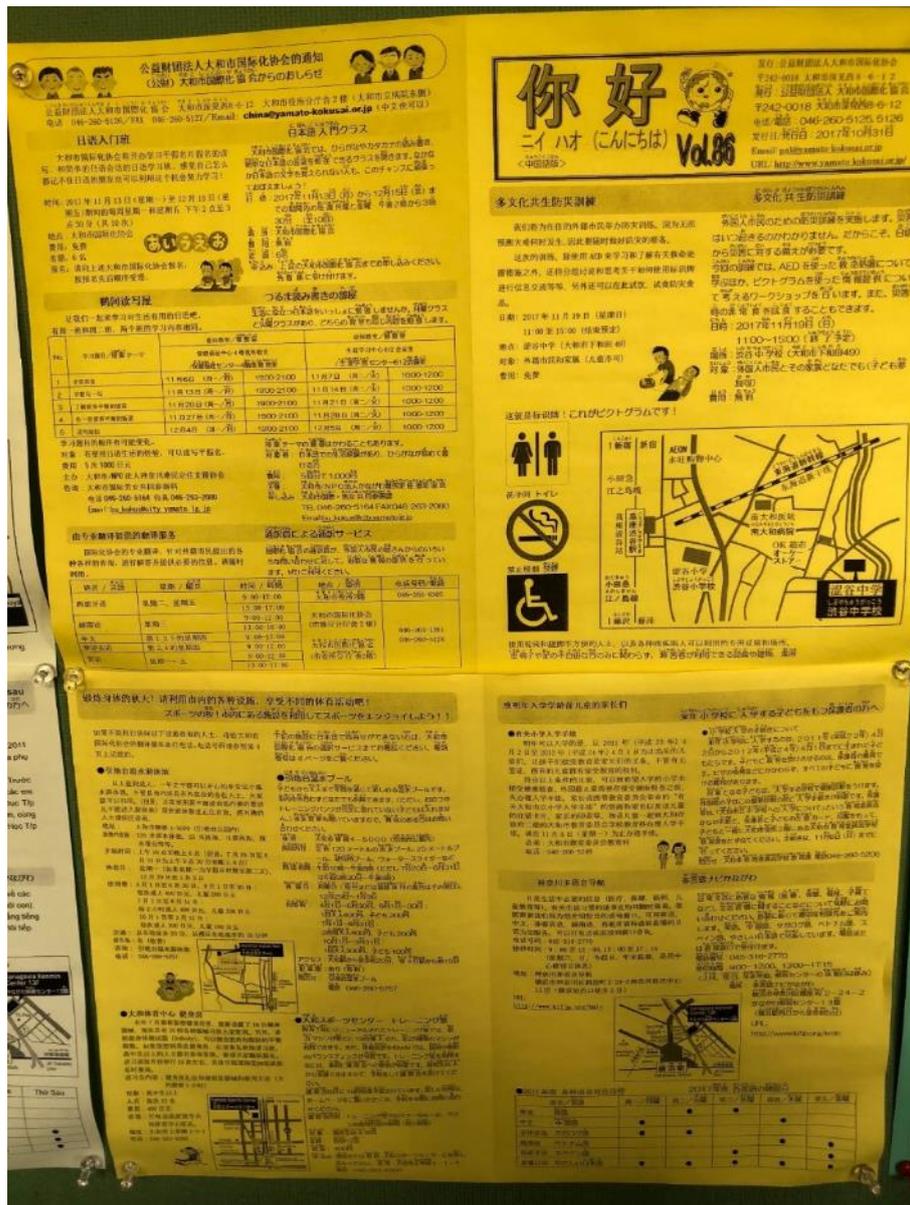
もちろん最初は何の実績もなかったのですが、すぐに地域にうちとけることはできなかったのですが、地域行事や行政主催の会議などに参加し続けて、祭りの準備や後片づけのお手伝いをしているうちに、少しずつ学校や地域の方から声をかけていただけるようになりました。



「ハヤカワさん！」祭りの最中もたくさんの声がかかる

#### ■つながりを地域活動に活かす

日本語教室に子どもがやって来たのをきっかけに、学校の授業の補習教室を始めたり、日本語の力を身に付けた若者の力を生かして、生活相談や防災活動、多言語による情報発信を行いました。また、活動を通して知り合った人たちが一緒にサッカーをしたり、地域交流行事へ参加したりすることによって交流を深められるような場をつくるなど、事業を通じて生まれたつながりを活かした新たなつながりの場をつくってきました。



外国の方も読めるように、ニュースレターを作成

この活動を長く続けていると、国籍を問わず、多くの人とのつながりができます。

活動を始めた頃に小学生として教室に参加していた子どもたちが、おとなになり結婚して、その子どもが私にあいさつをしてくれるようになりました。

いつの間にか私にとって、このまちは大事な居場所になっていました。

あいさつをしたり言葉を交わしたりできる相手がたくさんいるということが、生きる上でとても大事なことなのではないかと思います。

このまちに暮らす人たちが、国籍や言語に関わらず、つながりを持って末永く楽しく暮らせるまちにしたいと思っています。



「多文化の若手が祭りの準備や片づけを手伝ってくれて助かるよ」 (写真左から連合自治会の簗島副会長、八木会長)



子ども神輿の様子



異国情緒あふれる出店が並ぶ

泉区事例集 2018  
連長インタビュー



いちょう団地連合自治会 やぎ ゆきお 八木 幸雄 会長

取材：いちょう団地祭り、多文化まちづくり工房

まちのルールを住民全員が守ることは難しいかもしれません。どの地域でもそうではないでしょうか。しかし、そうであってもお互いが歩み寄る余白をしっかりとつくりたいと常々思っています。

ここいちょう団地には、さまざまな国籍のいろいろな文化をもった住民が居住しています。今では他地区の方も来場される「いちょう団地祭り」は、これまですべて自分たち（自治会町内会）の手づくりで運営してきました。しかしこの地区も高齢化が進み、自分たちだけでお祭りをすることが難しくなりました。そのような中、外国籍の方々が設営や後片づけのサポートをしてくれることや、お店を出店して盛り上げてくれるなどの継続したお祭りの運営を通じ、「住民同士」の距離はぐっと縮まりました。

ここまで来るのに少し時間はかかりましたが、地域住民が国籍にとらわれず力を合わせて地域行事を運営する大切さを身にしみて感じています。